



TITLE:

京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要2

AUTHOR(S):

中村, 徹也

CITATION:

中村, 徹也. 京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要2. 1975

ISSUE DATE:

1975-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151824>

RIGHT:

京都大学農学部総合館北棟建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査の概要 〔Ⅱ〕

昭和 50 年 3 月

発掘調査担当者

京都大学文学部助手 中 村 徹 也

I 調査の経過

本調査は、京都大学北部構内農学部総合館北棟の増築計画に基づき、昭和49年2月から7月にかけて2次にわたった事前調査を受けて同年11月に行なった第3次調査である。

増築計画で示されていた予定地域の西半分は、既設の旧農学部本館が残存していた。したがって第1・第2次調査の際は同地域の東半分約800㎡を対象とした〔第1図〕。工事着工とともに旧農学部本館およびそれにともなった既設の埋設諸管が取り払われ、この段階で第3次立会い調査が開始された。

本調査の対象となった同予定地西半分は、前述の旧館の基礎および埋設管工事のため過去にかなりの攪乱をうけている。

第1・2次調査で判明した北白川扇状地の末端が西の低平地に移行する傾斜変換線のさらに西側にあたるため、この調査では東から流れてきた遺物包含層の拡がりの確認と、遺物の採集を目的とした。

人力による発掘作業が困難であるため、機械により先史層上面まで掘り下げ、先史時代層に東方向のトレンチを設定して包含層の観察を行なった。実際に調査を行なった地域は包含層の存在したF'-19区およびG'-19区である。

調査関係の要領は、第1・2次調査と異なる項目についてのみ記す。

調査期間 昭和49年11月8日～11月16日

調査面積 約800㎡

II 地形と層位〔第2図〕

調査地域は北白川扇状地の南端部に近く、扇状地末端が西斜して低湿平地に接する地点であるということが、第1・第2次調査で想定されていた。このことはおおむね誤まっていたが、本調査の地層観察から推察すると、この地点はまだ低湿平地と接しておらず、扇状地末端上に位置している。

層位は大別して上下二つの層群にわかれる。地表下約1.4mからはじまる厚い白川砂の堆積層をはさんで上方に歴史時代各層、下方に先史時代各層が見られる。この層序は前回調査した東の地区のそれとまったく同様である。ただし先史時代各層が西に向かって次第に粘質性を失い、水

成層の様相が薄らいでゆくこと、また間層である白川黄砂層がG'区に入って薄くなり消滅すること、この地域の地形の想定において前回の調査結果の判断を訂正する必要が生じた。すなわち前回調査で白川砂層はC'区から始まり西に向かって次第に厚さをまし、それにともない下方の先史時代各層も粘質性を増して水成層の様相に変化していたことから、扇状地の西端を想定しこの地域を低湿平地へ移行する接点とみなしていた。

今回の地層観察の結果、まず東から西へ共通して存在する最下の粗い白砂層のベースを削り取ってできた凹地に、つぎに先史時代の包含層群が堆積している。これら粘質砂層が堆積を終えた時点でそこは若干の凹地を形造っており、これがC'区からG'区までを川幅とする白川砂層を運んだ南北方向の河川の流路となったと想像されるのである。

この南北方向の流路は奈良時代以前であり、北白川扇状地上を流れたもので、ある時期の扇状地形成を示すものである。したがってこの地域は扇状地の末端に近い台地上と考えた方がよい。

先史時代各層が大きく3層にわけられるのは前回の調査と同様である。西に行くにつれ粘質性はなくなる。縄文式土器および石器の包含密度は濃く、しかも破片は東地区のそれに比較して大きい。土器にみられる磨滅度も比較的すくなく、ローリングの度合いのすくなかったことを示す。

遺構はまったく発見されない。包含された土器も3層にそれぞれ同形式のものが混在しており、層位的連続はこの地域ではまったく考慮できない。

Ⅲ 出 土 遺 物

整理が完了していないので特徴的な先史時代層出土土器および石器を記すにとどめる。

〔土 器〕

縄文式土器と弥生式土器が出土している。縄文式土器は前期後葉から晩期末までで、総量はコンテナに約5杯である。そのほとんどが細片であるが、本遺跡第2次調査の土器より破片は概して大きい。弥生式土器は数片出土しているだけで、前期に限定されている。各期の土器は層位の区別なく出土した。

本概要における以下の分類は整理作業が中途であるので、便宜的に大まかな時期による分類と型式による分類とを併用した。型式による分類は地方色・地域色を考慮していないので、特に他の地方の型式名を使用した場合は、あくまでも類似しているという程度の表示である。

①縄文前期後葉の土器〔図版Ⅰ-1,Ⅶ-1〕

厚さ 3 mm の薄手で黒色を呈する焼の堅い土器である。口縁内面に段状に肥厚した縄文帯を持つ。表面には低い突帯に平行沈線を引きあいだに爪形文を充填している。北白川下層Ⅲ式と思うが、やや下る可能性もある。

②船元Ⅲ式〔図版Ⅰ-2, Ⅶ-1〕

厚さ 1 cm の厚手の土器で、粗い縦走向の縄文地に半截竹管で平行沈線を多条に施している。

③船元Ⅳ式〔図版Ⅰ-3～Ⅱ-3, Ⅶ-1～Ⅷ-1〕

条が交互に深浅に押捺された縄巻縄文風の縄文を地に持つ土器を主体とする。浅い条が不明瞭な縄文(Ⅰ-4・5), 条が深・深・浅の順になる縄文(Ⅰ-14)もある。Ⅰ-17は無地の土器で里木Ⅱ式の可能性もある。Ⅱ-2・3は器形・文様が他の土器と異なる。Ⅱ-2は口縁部に半截竹管で波状文を施しているなのでこの型式に入れたが、船元Ⅲ式の可能性もある。Ⅱ-3の文様は船元Ⅱ式に類例があり時期が遡るかもしれない。

その他の土器はほぼ同一の内容を持つ。すなわち、突帯と半截竹管の平行沈線とを平行して施す土器(Ⅰ-3・4), 半截竹管で直線的沈線文を施す土器(Ⅰ-5～9), 同じく連弧文を施す土器(Ⅰ-10～12), 口縁直下に半截竹管の平行沈線で波状文を施す土器(Ⅰ-13・14)などがある。頸部無文の土器(Ⅰ-15～17・19・20)は波状文を持つことが多い。

Ⅰ-21・22はこの型式の底部である。Ⅰ-21は割れ口が凸状の粘土のつき目になっていて作り方がわかる。また全面に縄文を施したのちに再度底部を調整していることがわかる。

④里木Ⅱ式〔図版Ⅱ-4～19, Ⅷ-2〕

棒巻縄文地に文様を施す土器を主体とする。地に縄文を持たない土器(Ⅱ-11・18・19)や文様を持たない土器(Ⅱ-13・14)もある。

棒巻縄文地に細い突帯を持つ土器(Ⅱ-4・5)がある。口縁直下の文様は、半截竹管の平行沈線で施す波状文(Ⅱ-6), 棒状工具で平行沈線内を刺突して施す波状文(Ⅱ-4・9), 半截竹管で施す爪形文(Ⅱ-5), 半截竹管で施す破線沈線文(Ⅱ-7・8), 棒状工具で施す平行直線文(Ⅱ-10), 半截竹管を押し引き状に使用して施す波状文(Ⅱ-11)などがある。

Ⅱ-11は無地で器形も他の土器と異なるが、波状文の作り方は棒巻縄文地のⅡ-12と同一であるので、この型式に属する、Ⅱ-19の口縁内面の縄文は無節の縄文の可能性もある。瀬戸内海地方のこの種の土器と比較して口縁端部に縄文を持つ例が多い。

⑤古府式〔図版Ⅱ-20・21, Ⅸ-1〕

明るい褐色を呈する薄手の土器で表面は丁寧になで調整している。低い突帯の両側に篋状工具

で沈線を施している。文様は直線と渦巻の組合わせが多い。文様集約部の口縁上端に指頭圧痕を持つボタン状の突起を施す土器が多い。ほとんどが北陸地方からの搬入品であろう。

⑥咲畑式〔図版Ⅱ-22・23, K-1・2〕

無地に突帯で文様を施した土器。Ⅱ-22は突帯間に爪形文を充填している。この種の文様は本遺跡のこの型式には多い。Ⅱ-23は2本の突帯で横向きのS字形文を施し、口縁と突帯の間に数条の波状突帯を貼付けた網状の文様を充填した土器である。この型式もほとんどが中部地方ないし東海地方からの搬入品であろう。

⑦縄文中期末・後期初頭の土器〔図版Ⅱ-24～Ⅴ-26, X-1～Ⅳ-3〕

出土土器の主体をなす土器群で、所謂加曾利E式的な器形と文様を持つ土器と、中津式的な文様を持つ土器とからなっている。時期的細分の可能性もあるが、本遺跡では層位的な出土をみなかったので1群として扱った。器形と文様から5類に分類した。分類は時期差を示さない。

第1類 所謂加曾利E式的な有文深鉢形土器。〔Ⅱ-24～Ⅳ-9〕

口縁部形態と文様から7種に細分した。

A種 〔Ⅱ-24～Ⅲ-4・11〕 ゆるく外反する胴上部に稜を持って直立または内彎した口縁部を持つ土器。口縁は平直な口縁またはよわく波状をなす口縁である。口縁部文様帯と胴部文様帯を稜で区分している。口縁部文様は区画文と直線文が多い。

B種 〔Ⅲ-5～8〕 ゆるく外反する胴上部と肥厚した口縁部を持つ土器。A種とはこの他の点では区別しない。

C種 〔Ⅲ-9・10〕 直立した口縁部を持つ傳手の土器。口縁部文様帯が胴部文様帯と区別できない土器が多い。

D種 〔Ⅲ-12～14〕 ゆるく外反する胴上部にやや内彎した口縁部を持つ土器。口縁部文様の集約部が渦文となり、その部分が波状口縁の波頂部となる土器が多い。突帯で文様帯を区分している。他の種と比較してやや古い様相を持っている。

E種 〔Ⅲ-15～17〕 外反する胴上部・口縁部を持つ土器。種としてのまとまりがない。

Ⅲ-15は橋状把手を複数持った土器である。Ⅲ-16は他の地方の後期初頭の土器であろう。

F種 〔Ⅲ-18～25〕 やや外反する胴上部と口縁部を持つ土器で、口縁直下が縄文帯または無文帯となりその下に連続した突帯の楕円形区画文を施す土器。楕円形区画どうしをつなぐ部分が橋状把手になる土器（Ⅲ-18・19）と突起になる土器（Ⅲ-22・23）とがある。把手ないし突起の上方に沈線または指頭圧痕を施す例が多い。Ⅲ-25はこの種では特殊である。

G種 〔Ⅲ-26～Ⅳ-9〕 把手状山形口縁を持つ壺形に近い器形の土器。口縁部が直角に内折する土器〔Ⅳ-1～6〕、口縁部が内側にむけて肥厚した土器〔Ⅲ-26～28〕、口縁部が胴上部と区別できない土器〔Ⅳ-7〕などがある。それぞれ文様に独自性と規則性があり将来複数の種に分類できるであろう。

第2類 中津式的な有文深鉢形土器〔Ⅳ-10～13〕

曲線的文様が主体となる土器。J字形文は口縁から直接垂下する。京大構内出土の土器のJ字形文はすべてこの種である。Ⅳ-13は文様帯が縦割りで中津式の典型とは異なる。また口縁上端に縄文を持ち第1類に類似する。

図版Ⅳ-14～Ⅴ-6は第1類と第2類の胴部および特殊な有文土器である。Ⅳ-14は横位の結節縄文を持つ土器である。Ⅳ-21は微隆起線文を持つ土器で赤色顔料が塗布されている。Ⅴ-1～3は突帯上に指頭圧痕を持つ土器である。Ⅴ-4～6は櫛状工具ないし篦状工具による条線を持つ土器である。

第3類 縄文地の無文深鉢形土器〔Ⅴ-8～11〕

器形は口縁がやや外反する土器と直立する土器がある。Ⅴ-11は間隔をあけて縄文を縦にころがした土器である。

第4類 無地の無文深鉢形土器〔Ⅴ-7・12～16〕

この類の土器はほとんど粗いナデ調整が施されている。Ⅴ-13は磨きさが著しい土器で碗形になる可能性がある。出土量はさほど多くないが、器形は変化に富んでいる。口縁端部や内面にだけ縄文を持つ土器もある。

第5類 浅鉢形土器〔Ⅴ-17～20〕

胴部の極端に張る研磨の著しい土器が主である。Ⅴ-17は表面をナデ調整し口縁内面に爪形文を施した土器で、器形・文様は他の土器と異なる。

図版Ⅴ-21～23は器形不明の土器である。今後の整理作業を待ちたい。

図版Ⅴ-24～26はこの時期に一般的な底部である。Ⅴ-25は底部の円板が剥がれている。今回の調査では網代底は出土していない。

⑧縄文晩期末の土器〔図版Ⅴ-27・28, XIII-2〕

表裏とも丁寧にナデ調整し口縁直下に刻目突帯を施した深鉢形土器である。第2次調査出土のこの時期の土器と若干異なる。

⑨弥生前期の土器〔図版Ⅴ-29, XIII-2〕

灰褐色を呈した筥磨きの著しい土器。壺形土器の胴部の破片である。

今回の調査で出土した土器は縄文中期末・後期初頭の土器が最も多く、船元Ⅳ式・里木Ⅱ式の順に多い。これは前回の調査とはほぼ同じ割合で出土していることを示している。今回の調査で古府式と咲畑式の存在を確認できたが、古府式・咲畑式と共存する地の土器型式は層位的に把握できなかった。可能性として里木Ⅱ式の一部に併行するという考えも成り立つであろう。

京大農学部概要〔1〕の第Ⅵ類A種は、この分類の第1類G種に、第Ⅵ類B・C・D種は第1類A・B・C・D・E・F種に相当する。

〔石器〕

本遺跡の第3次調査で出土した石器は無茎石鏃、石匙、削器、敲石、切目石錘、磨製石斧、磨石、切目石錘加工具などである。その他にサヌカイト、チャートなどの剝片が出土している。各石材については、まだ正式な鑑定を行っていないものもある。

①無茎石鏃〔図版XV-1〕

17点出土している。未成品を3点含む。石材は7点がサヌカイト、1点がチャート、4点が安山岩と思われるが、不明なものがあり正式な鑑定を待ちたい。基部の形は凹基式と平基式があり、凹基式が13点、平基式が4点である。大きさは凹基式が1.4 cm～3.2 cm、平基式が2.2 cm～2.9 cmである。作りは凹基式は大型の石鏃がより丁寧であり、平基式はすべて粗雑である。凹基式1点は片面加工である。大きさは2.9 cmで本遺跡出土品の中では大型に属する。チャート製の石鏃は大きさ2.6 cmの凹基式で、作りは非常に丁寧である。

②石匙〔図版XVI-1〕

縦型の石匙が1点出土している。石材はサヌカイトである。大きさは4.2 cm×2.9 cmで先端を僅かに欠失する。縦方向の一辺に刃をつけている。

③削器〔図版XVI-2〕

1点出土している。石材はサヌカイトである。縦剝ぎの長方形剝片の一長辺に刃をつけたもので、大きさは4 cm×1.9 cmである。

④敲石〔図版XVI-4・5・6〕

3点出土している。1点は完形で重量は52.8 gである。円礫の扁平な両面に長軸の端から約3分の1の所に敲打痕がある。1点は破片で重量は14.0 gである。円礫の扁平な片面に深いあばた状の敲打痕があり、ここで敲打方向と平行に約半分に分れている。1点は破片で残存部は最

大長 12 cm, 最大幅 6.5 cm, 最大の厚さ 4.7 cm の直方体状をなす。重量は 102.6 g で石材は点紋粘板岩である。平滑な面に敲打痕がある。石材の形や敲打痕の状態は敲石としては特殊であり、破碎用の台として使用された可能性がある。

⑤ 切目石錘〔図版 XV - 2〕

14 点出土している。すべて渡辺誠氏のいう切目石錘 A 種である。ほぼ完形の 11 点のうち最も重いものは 111 g で、最も軽いものは 22 g である。50 g ～ 60 g のものが最も多い（Ⅴ - 第 1 表）。平均重量は 57 g である。石材は粘板岩系の軟かい河床礫を使用する。比較的丸い礫を使用するものを a 種（Ⅴ - 1）、細長い礫を使用するものを b 種（Ⅴ - 2）、扁平な礫を使用するものを c 種（Ⅴ - 3）とすると平均重量は a 種が 68 g, b 種が 55 g, c 種が 41 g である。本遺跡では第 2 次調査で計量可能な切目石錘が 56 個出土している。平均重量は 46 g で、a 種が 55 g, b 種が 46 g, c 種が 39 g である。第 3 次調査出土の切目石錘の重量別分布は第 2 次調査出土品とやや異なり、京大植物園内縄文遺跡の後期前葉の土器に伴う切目石錘に近い（Ⅴ - 第 2 表）。本遺跡出土の計量可能な切目石錘の 70 個の総平均重量は 47 g である。

切目は礫の長辺両端部を両面から擦り込んでつけたものと、両面から擦り込んだ接点を上面からさらに擦り込んだものと、両面にまたがって一工程で擦り込んだものがある。なお第 2 次調査出土品の中には長辺両端部を上面から擦り込んでつけたものもある。長辺両端部を両面から擦り込み、接点を上面から擦り込んだものが最も多い。打ち欠きの上に切目をつけたように見えるものもあるが、拡大して観察すると使用によって欠損したことがわかる。このような現象が長辺の両端部にみられる例はない。

なお石器ではないが土器片錘が 1 点出土している（Ⅴ - 4, XIV - 4）。渡辺誠氏のいう土器片錘 A 種に相当し重量は 10 g である。同地域では大正 11 年に京大農学部敷地で重量 13 g の土器片錘が 1 点採取されている。

⑥ 磨製石斧〔図版 XVI - 7・8〕

2 点出土している。石材はいずれも輝緑凝灰岩である。1 点は定角式磨製石斧で刃部と基部を欠失する。残存部は最大幅 4.9 cm, 最大の厚さ 2.6 cm, 残存長 9.4 cm である。刃部の欠失部付近に使用痕がある。他の 1 点も定角式磨製石斧の側部の破片である。

⑦ 磨石〔図版 XVI - 3〕

1 点出土している。石材は花崗岩である。直径 7.8 cm の半球形で約半分を欠失している。

⑧ 切目石錘加工具〔図版 XVI 9〕

1点出土している。長さ11.3cm、最大幅4.5cmの扁平な石材の一長辺に刃部に平行する使用痕がある。石材は珪質粘板岩で、石錘に使用する石材よりもやや硬い。使用痕の方向、石材からこの石器は石錘の切目をつけるために使用した加工具であると考ええる。

本遺跡では明確な層序がなく土器と石器の対応関係は不明である。無茎石鏃、石匙、敲石、切目石錘、定角式磨製石斧などの石器のセットは第2次調査出土品と共通する。

本遺跡出土の切目石錘の平均重量は滋賀県醍醐遺跡に近くやや重い方に属する。岐阜県において切目石錘は中期後葉の中頃に10g以下の小型品が現われ近畿地方に影響する過程で大型化したと考えられることや石器の組成からみて、本遺跡の石器は中期末・後期初頭の土器に伴うものであると考ええる。

IV 結 語

本調査は、前回の第1・2次調査にひきつづき建設予定地西半分について第3次立会い調査として行なったものである。調査地域内の包含層のひろがる面積は小さかったにもかかわらず、遺物の包含密度が非常に高く、また同地域の遺物の性格を考えるに適切な資料が第1・2次調査以上に多く出土した。

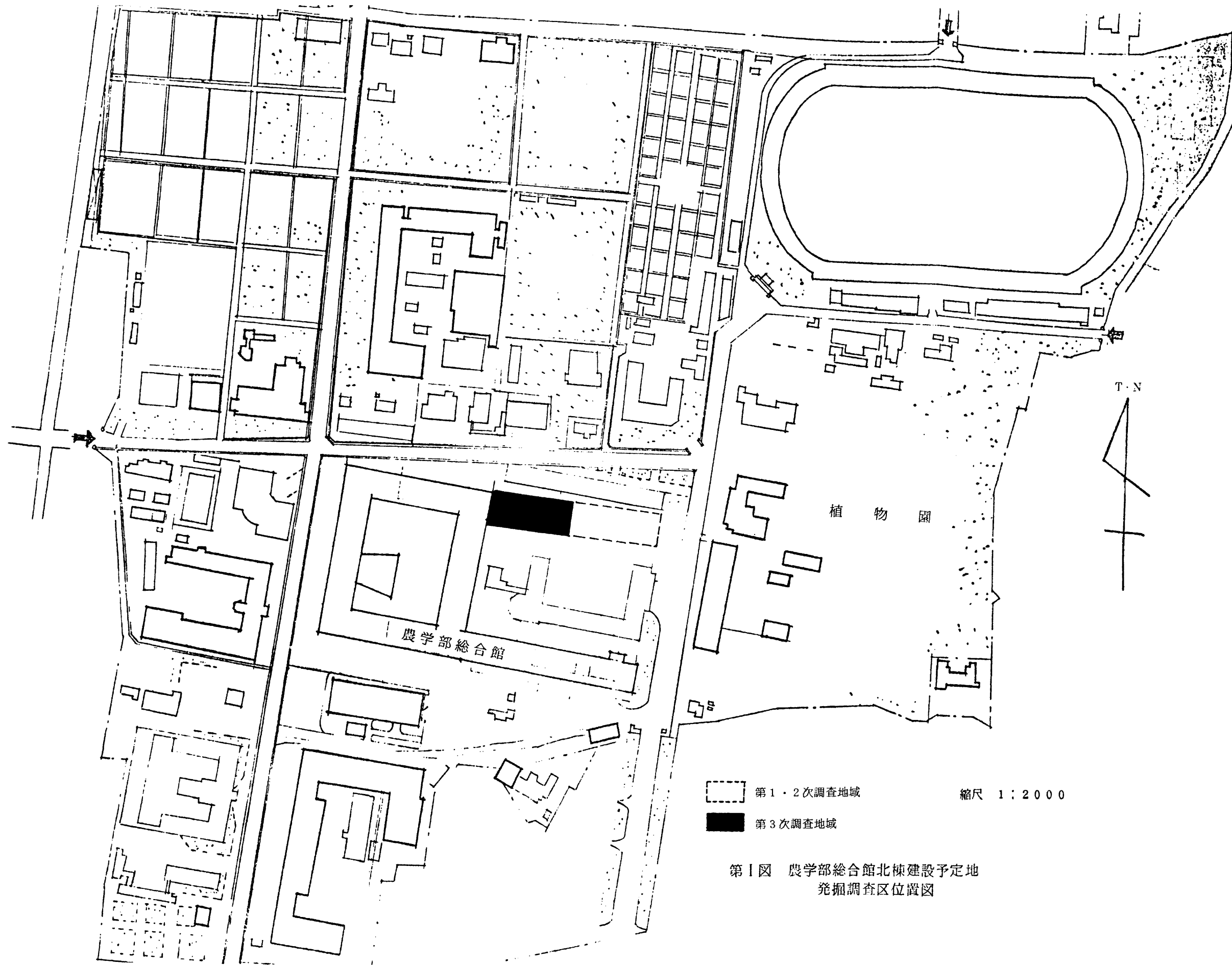
とくに縄文式土器は、前期から晩期に及びその大部分が中期末から後期初頭とみなされるものであった。前回調査のそれと同様多種多様のバリエーションをもつ。中でも今回の調査で改めて検出した咲畑式・古府式土器や、土器片錘・切目石錘加工具などは、多くの土器・石器とともに京大構内の縄文遺跡あるいは北白川扇状地上の縄文遺跡群の性格およびそれぞれの関連性を考えるうえで多大な資料を提供してくれたことは確かである。早い機会をもってすべての資料を整理し調査報告書の責を果すつもりでいる。

本稿中、■ 出土遺物の項のうち〔土器〕の項を泉拓良、〔石器〕の項を宇野隆夫その他の項を中村徹也が担当執筆した。

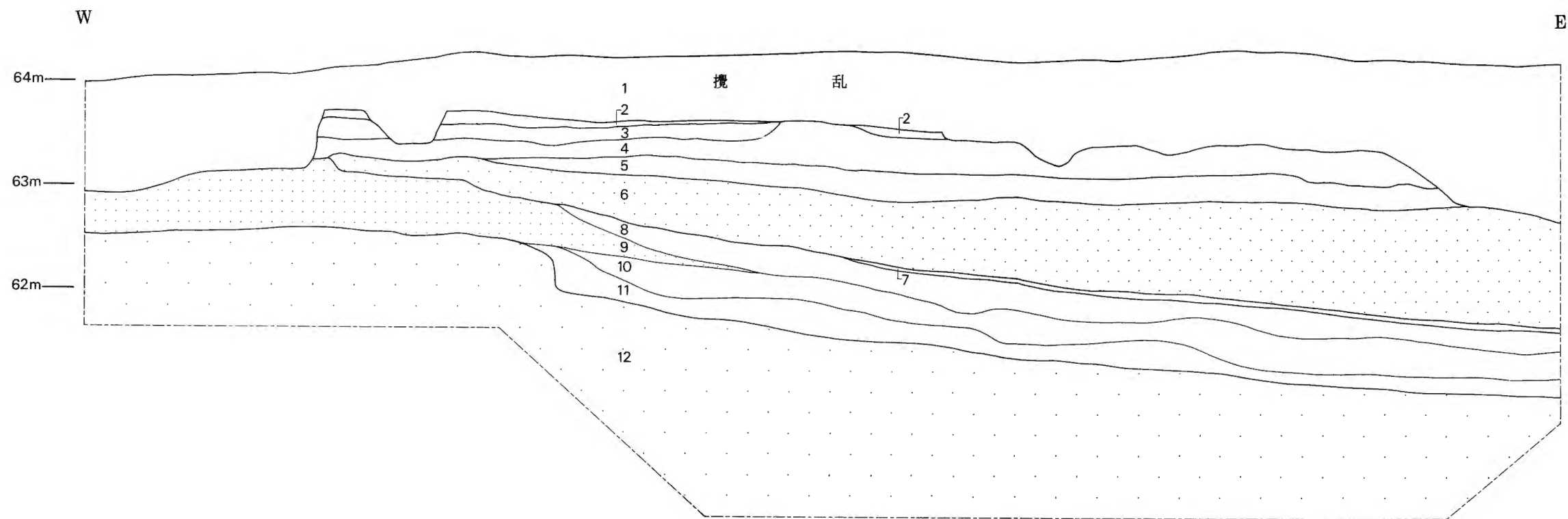
なお本概要作成にあたって、一部の石器の石材鑑定を京都大学理学部地質学鉱物学教室の中沢圭二教授にお願いした。

図面・図版の作成にあたっては多くの人の協力を得たことを記しておきたい。

図 面 ・ 図 版

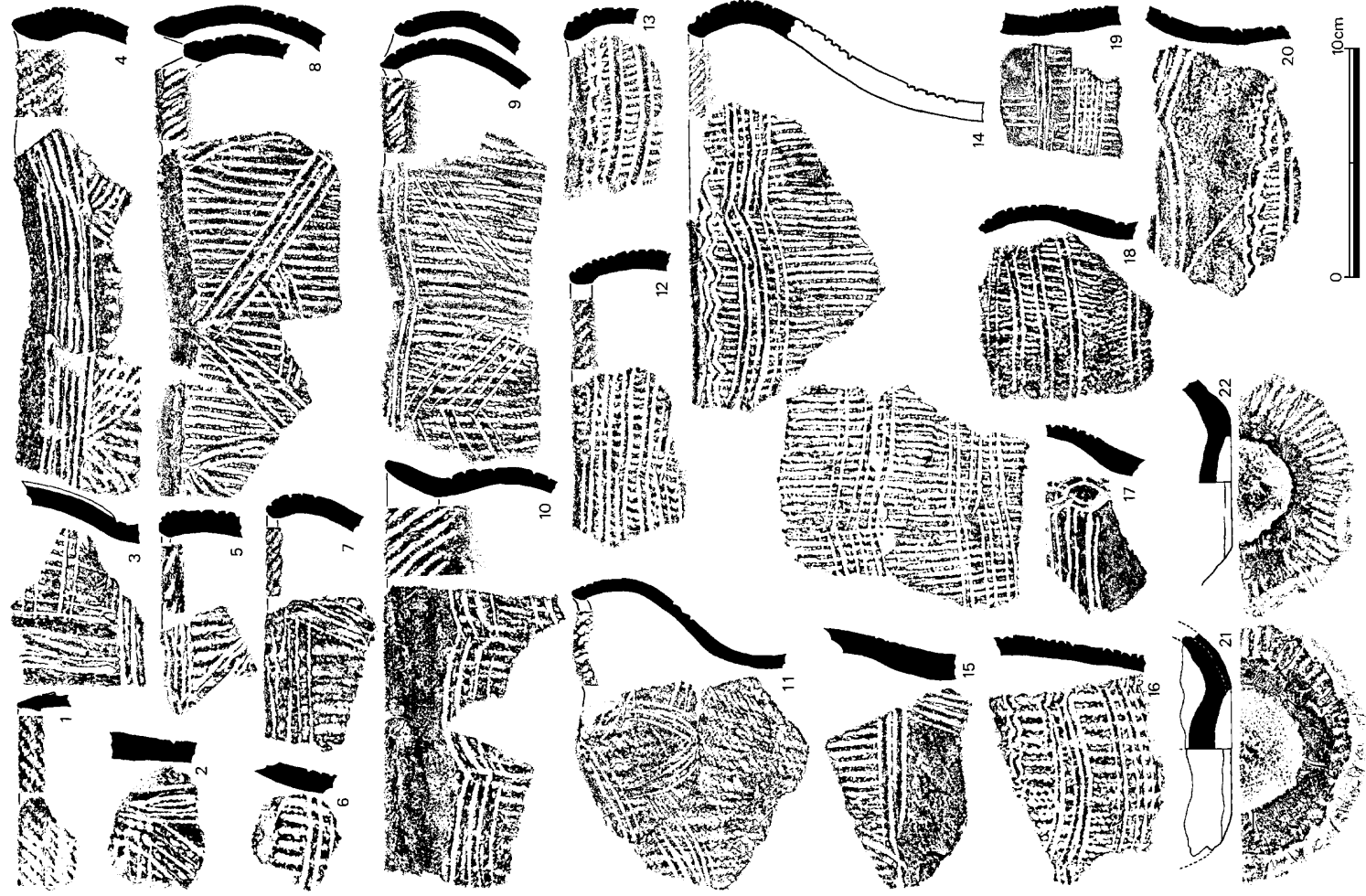


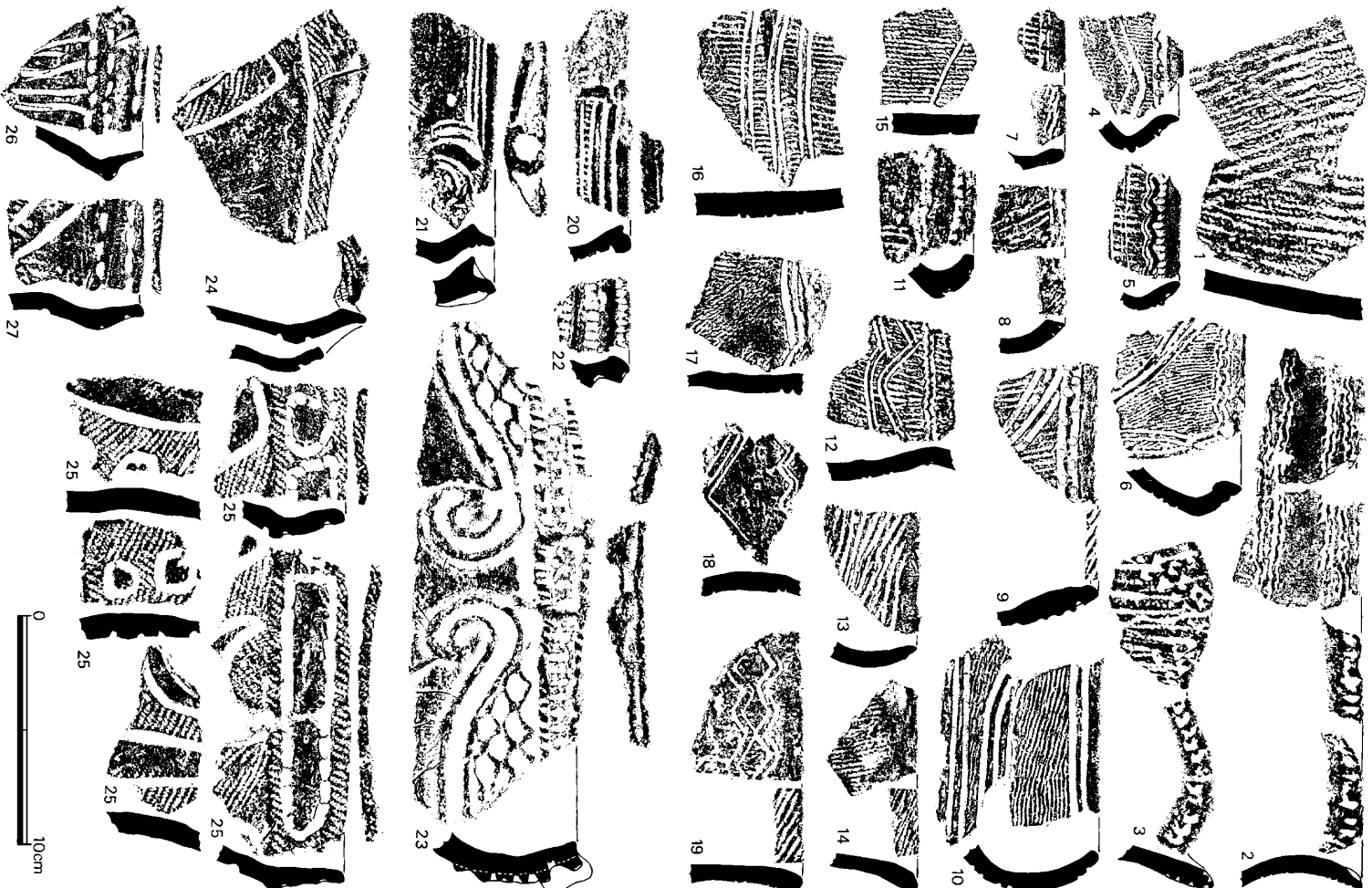
第1図 農学部総合館北棟建設予定地
発掘調査区位置図



- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 表土下攪乱層 | 7. 黒色粘質砂層（先史第Ⅰ層） |
| 2. 床土層 | 8. 暗褐色砂質土層（先史第Ⅱ層） |
| 3. 黄褐色土層（中世） | 9. 褐色砂層 |
| 4. 暗褐色砂質土層（平安時代） | 10. 褐色砂質土層（先史第Ⅲ層） |
| 5. 黒色砂質土層（奈良時代） | 11. 黄褐色砂質土層（先史第Ⅳ層） |
| 6. 黄色砂層 | 12. 白色砂層 |

第2図 F'G'区北壁地層断面図





船元Ⅱ式1～3 里木Ⅱ式4～19 古府式20・21 咲畑式22・23

縄文中期末・後期初頭第1類A種24～27



中期末・後期初頭 第1類A種1～5・11, 第1類B種5～8, 第1類C種9・10,

第1類D種12～14, 第1類E種15～17, 第1類F種18～25, 第1類G種26～28

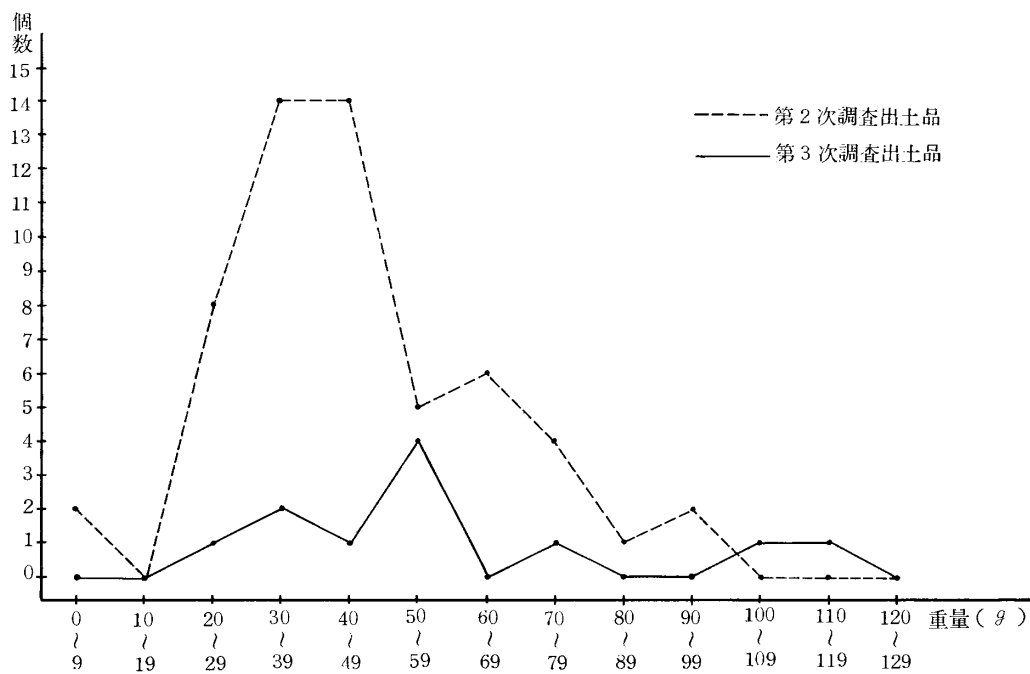


縄文中期末・後期初頭 第1類G種 1～9, 第2類 10～13, 第1・2類の胴部 14～20・22,
特殊な土器 21

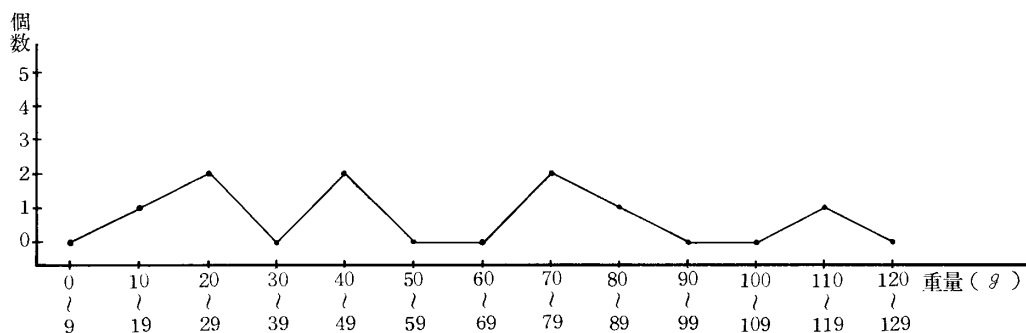


縄文中期末・後期初頭 特殊な土器 1～6, 第3類 8～11, 第4類 7・12～16, 第5類 17～20,
器形不明の土器 21～23, 底部 24～26 縄文晩期末 27・28 弥生前期 29

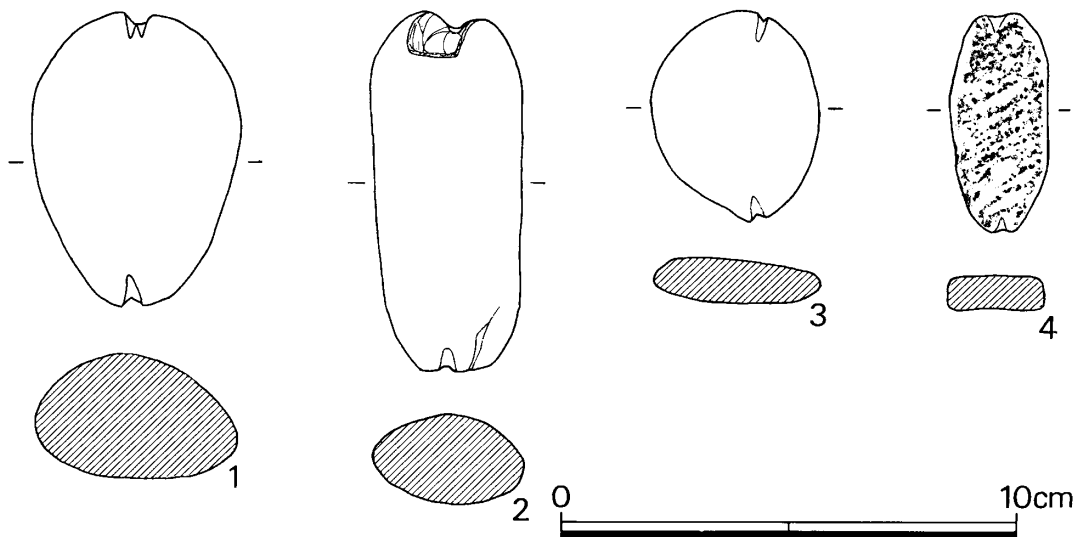
図版Ⅵ 切目石錘重量別分布表 切目石錘・土器片錘実測図

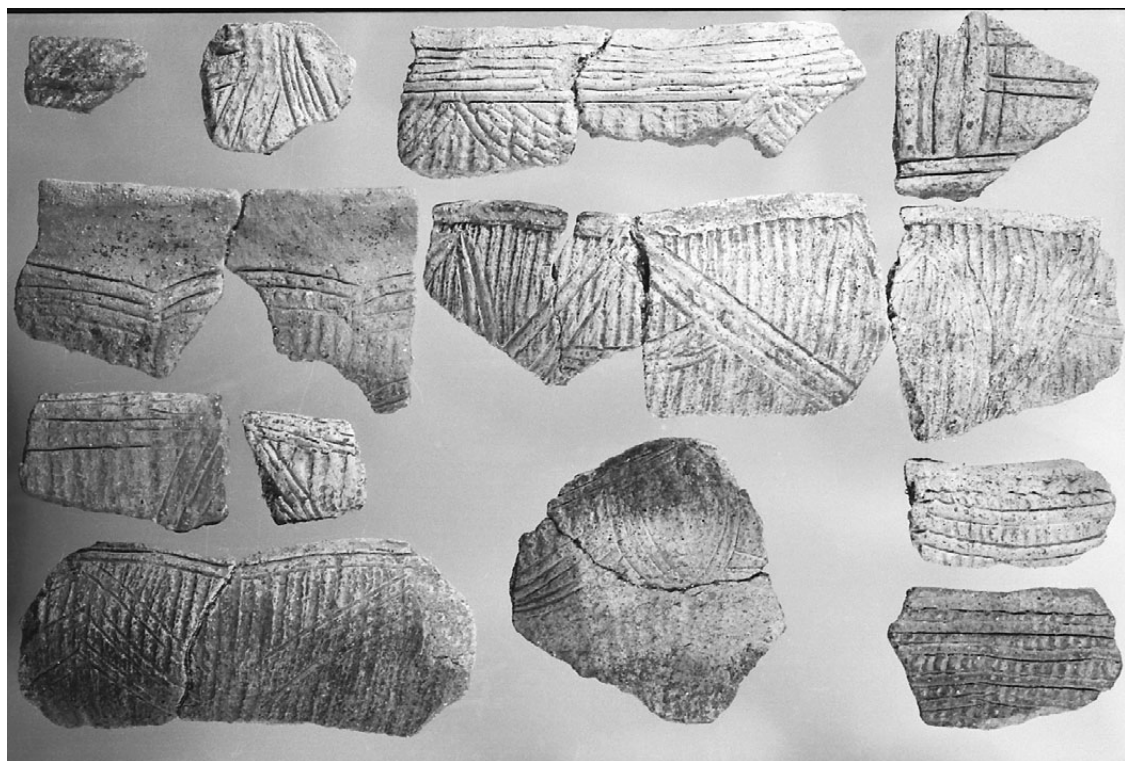


第1表 京大農学部総合館遺跡出土切目石錘重量別分布表 (重量は少数点以下四捨五入)

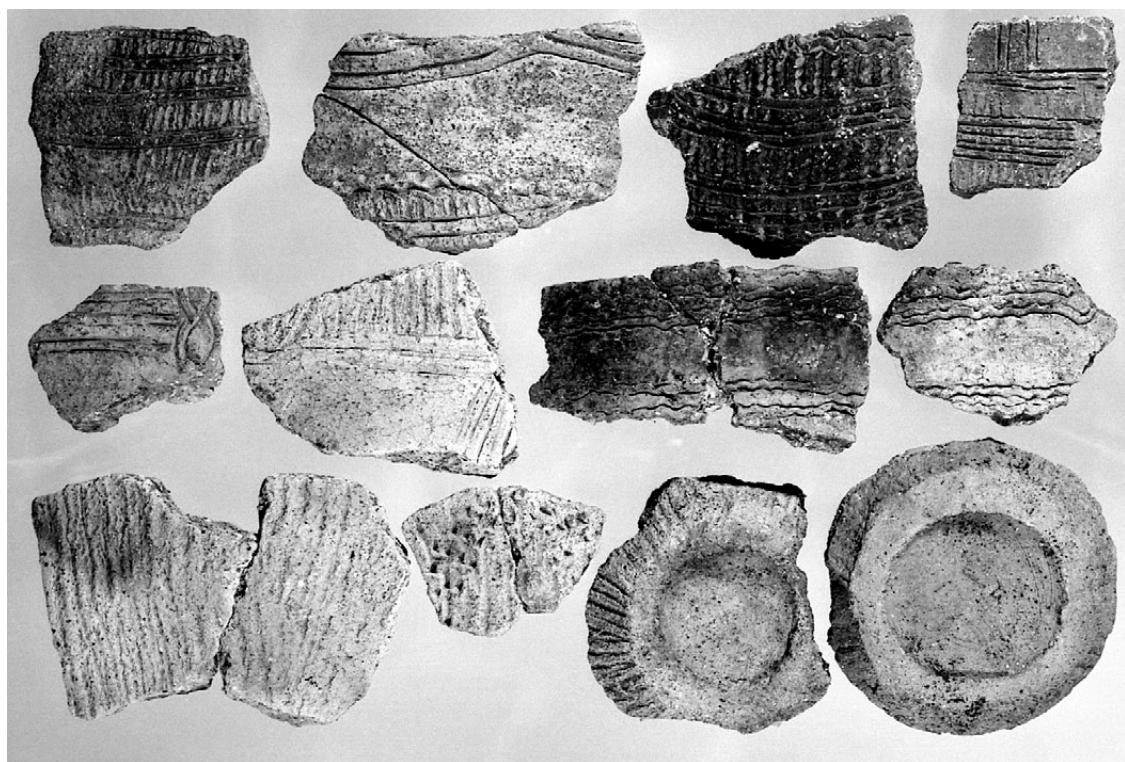


第2表 京大植物園内縄文遺跡出土切目石錘重量別分布表 (重量は少数点以下四捨五入)





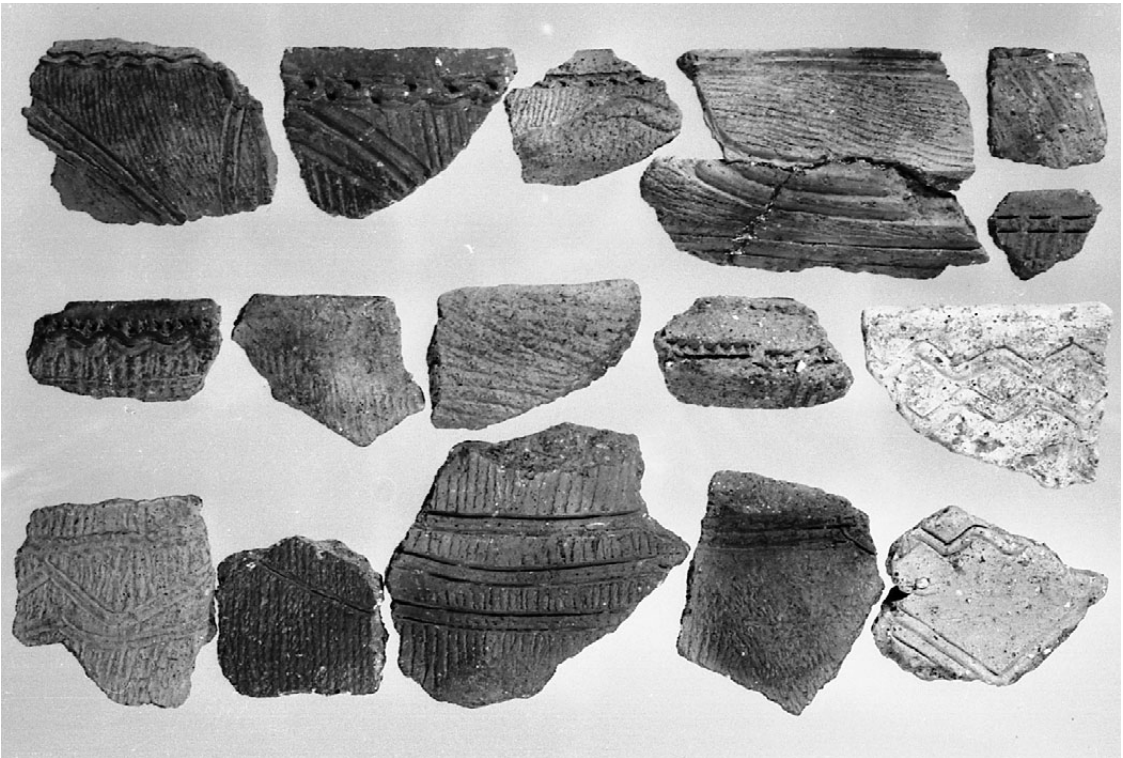
1. 縄文前期後葉 船元Ⅲ式・船元Ⅳ式



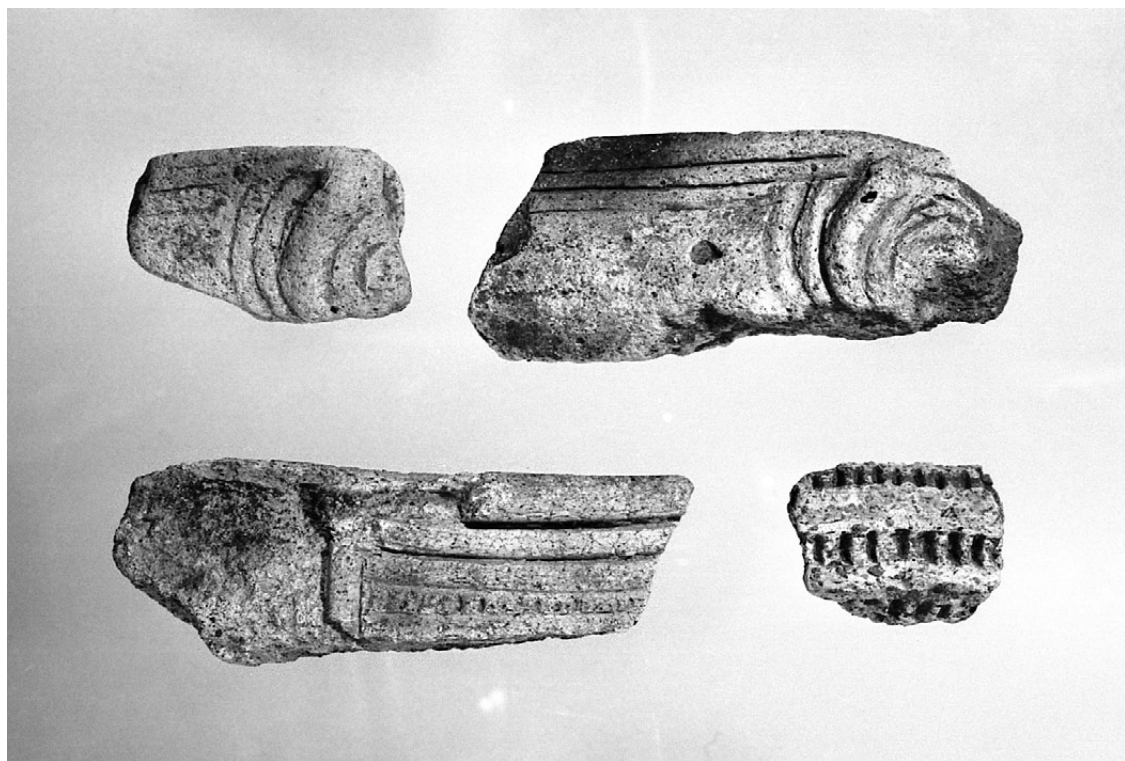
2. 船元Ⅳ式



1. 船元Ⅳ式



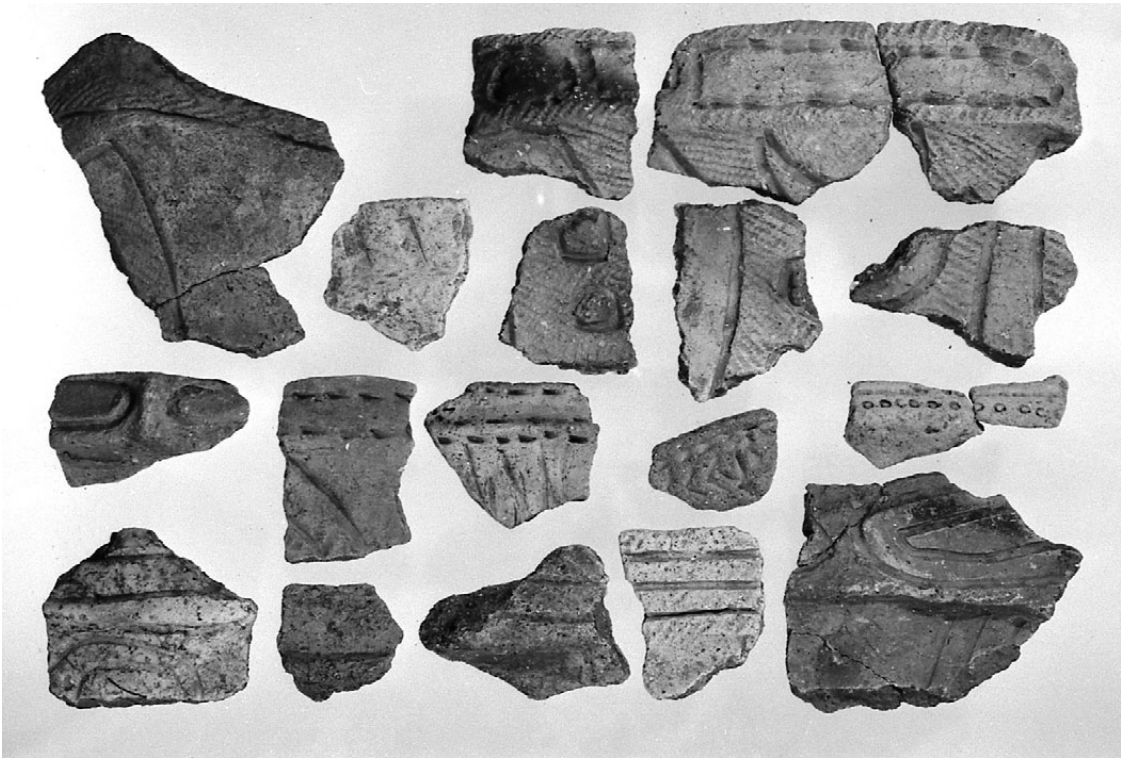
2. 里木Ⅱ式



1. 古府式・咲畑式



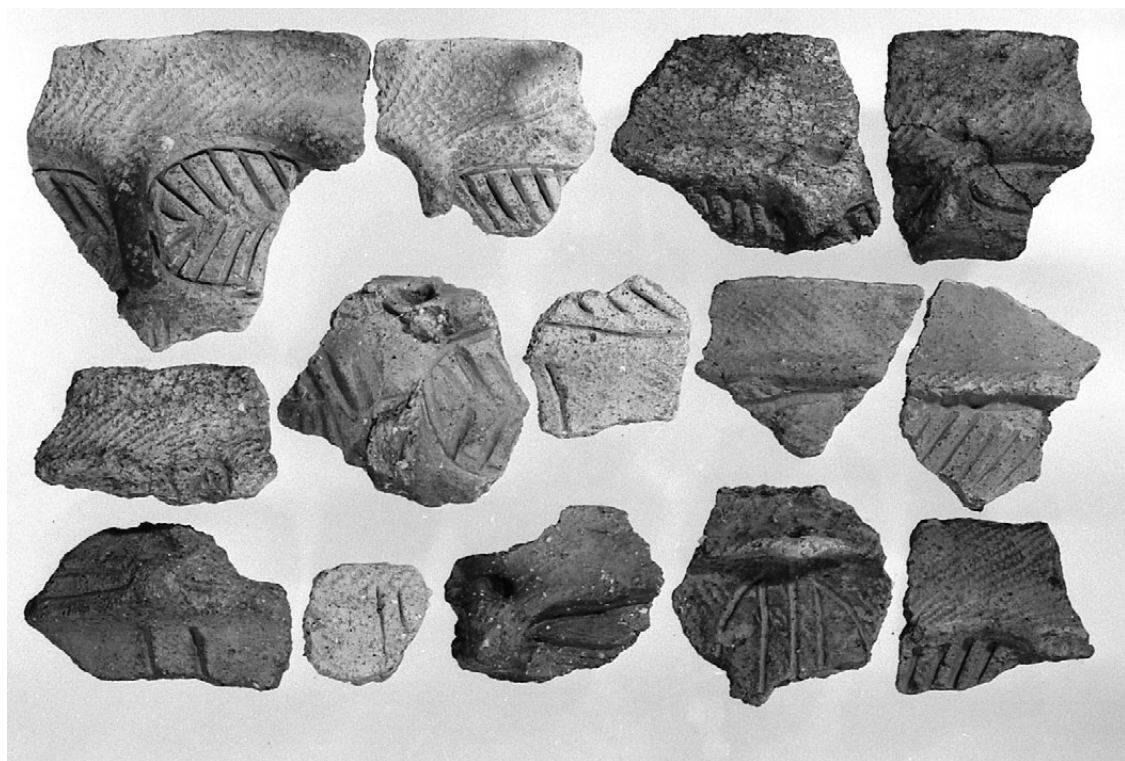
2. 咲畑式



1. 縄文中期末・後期初頭第1類A・B種



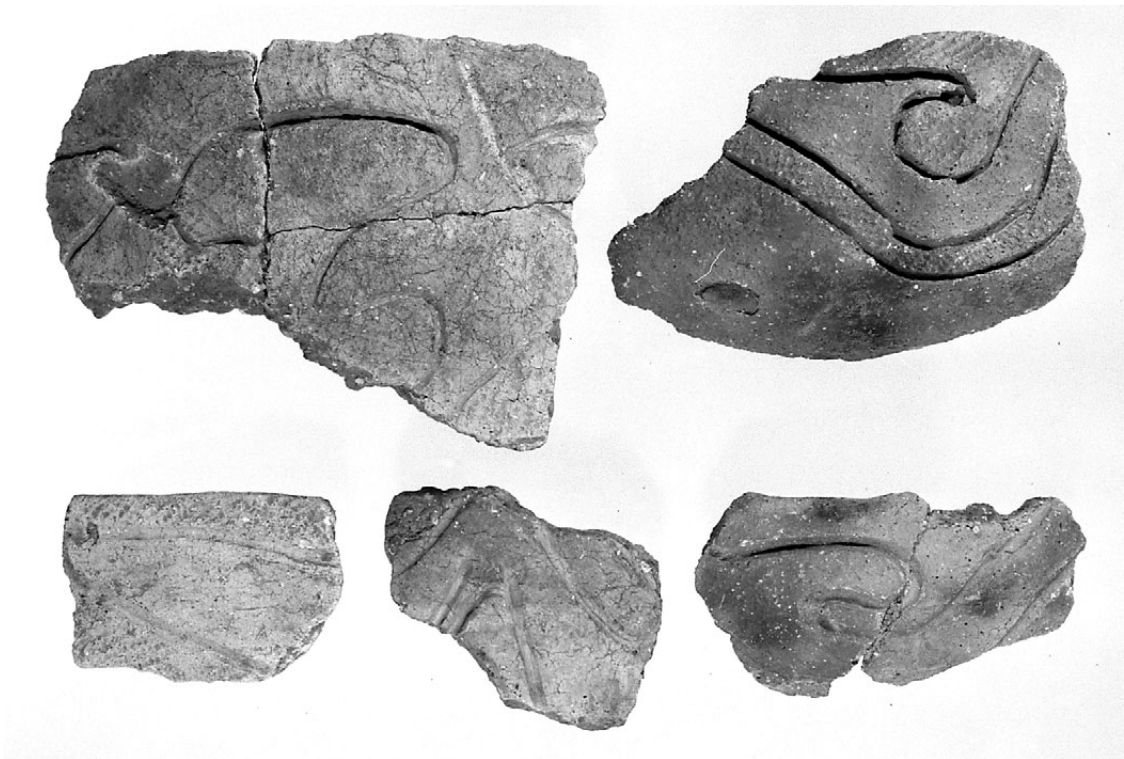
2. 縄文中期末・後期初頭第1類A・C・D・E種



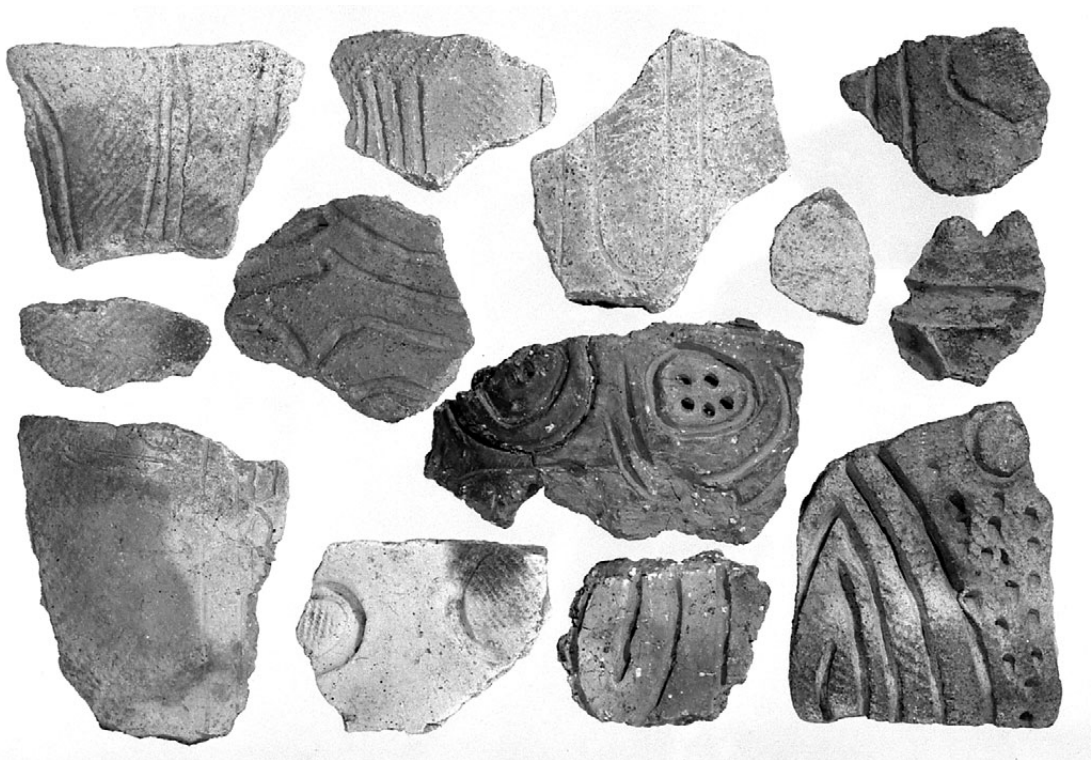
1. 縄文中期末・後期初頭第1類F種



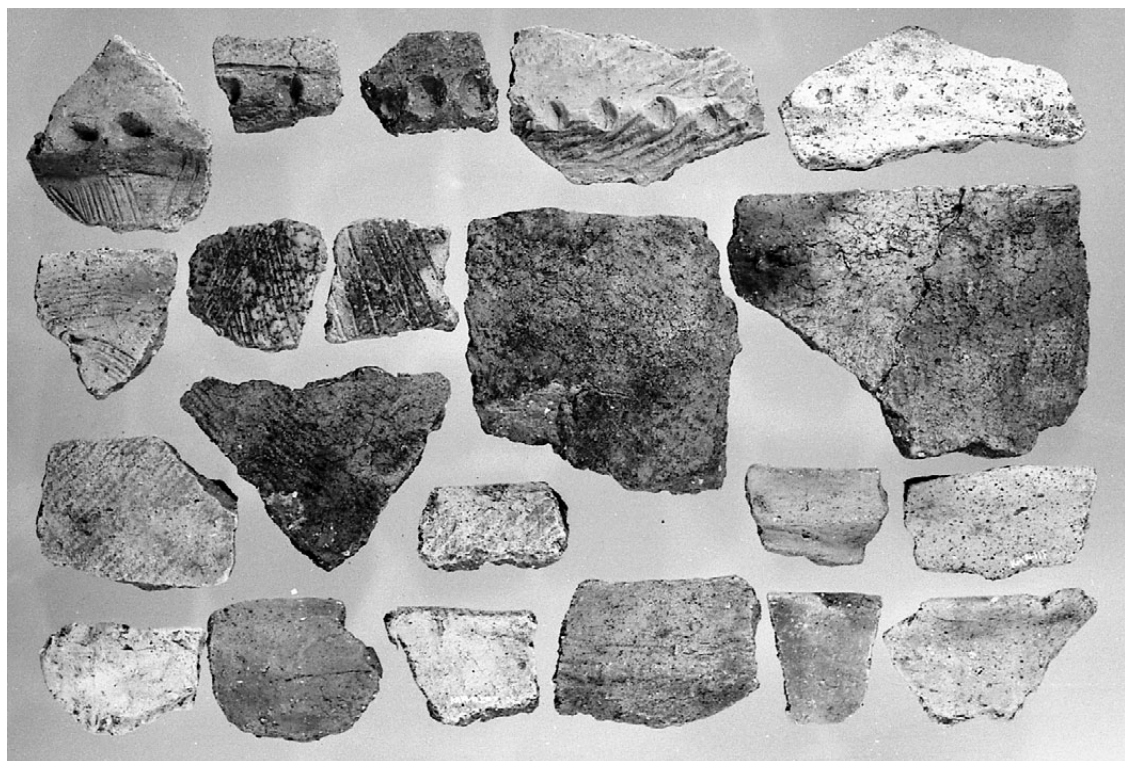
2. 縄文中期末・後期初頭第1類G種



1. 縄文中期末・後期初頭第2類



2. 縄文中期末・後期初頭 第1・2類胴部，特殊な土器



1. 縄文中期末・後期初頭 特殊な土器, 第3類, 第4類

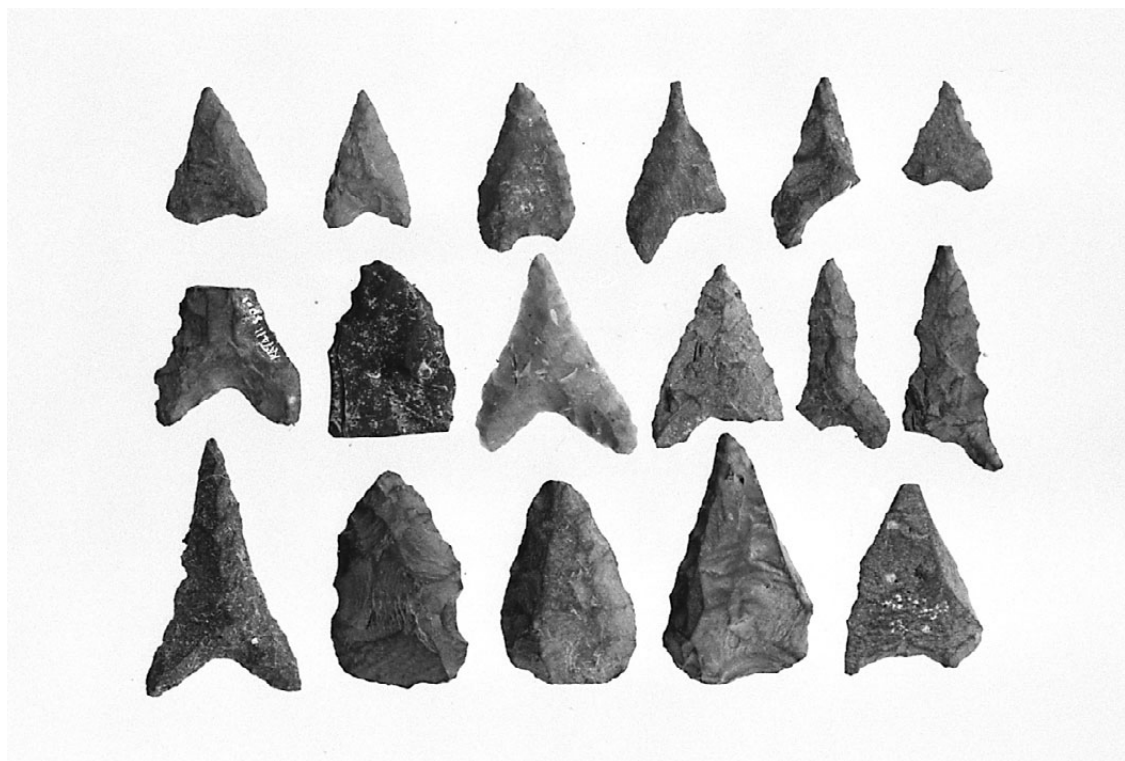


2. 縄文中期末・後期初頭 器形不明の土器, 第5類 縄文晩期末, 弥生前期



1, 2, 3 縄文中期末・後期初頭 底部

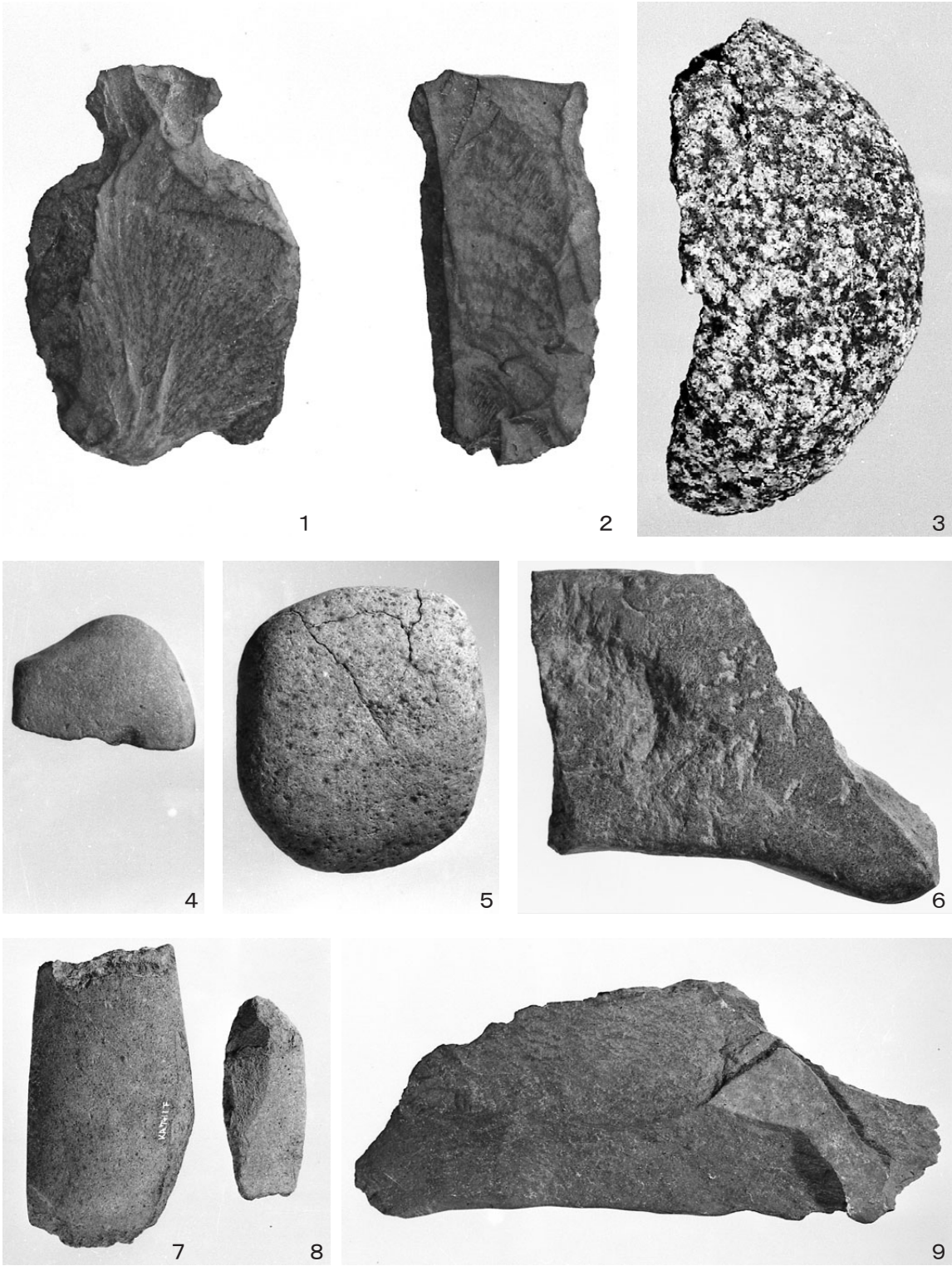
4. 土器片錘



1. 石 鏃



2. 石 錘



1. 石匙 2. 削器 3. 磨石 4. 5. 6. 敲石 7. 8. 磨製石斧 9. 切目石錘加工具